大阪府立千里高等学校
平成 28 年度 第２回スーパーグローバルハイスクール(SGH)運営指導委員会

日時:平成29年2月13日　12時20分～13時20分
場所:千里高校　校長室
出席者:
・運営指導委員
　久　隆浩　委員　近畿大学 総合社会学部 環境系専攻　教授
　藤本 英子　委員　京都市立芸術大学 美術学部　教授
　北村　素子　委員　大阪府教育センター 高等学校教育推進室 主任指導主事

・管理機関・大阪府教育庁
　若林　博行　指導主事　教育振興室 高等学校課　教務グループ

・千里高校
　松本　透　校長
　堀辺　慶一　教頭
　大西　千尋　首席(SGH 事業推進主担当・英語科)
　松井　活夫　教諭(SGH 委員・「探究」「探究基礎」主担当・国語科)
　近澤　一友　教諭(SGH 委員・「探究」担当・社会科)
　村上　晃　教諭(SGH 委員・「探究基礎」・「国際理解」担当・社会科)
　二井三喜夫　教諭(「探究」担当・社会科)
　野村　真理　教諭(「探究」担当・英語科)
　江口　拓馬　教諭(「探究」担当・国語科)

次第:
1，校長挨拶
2，本校の SGH 事業の取組状況報告
　1)　前回以降の取組
　　(ア) TA による論文指導(10月、1月)
　　(イ) オーストラリア研修旅行(12月)
　　(ウ) アンケート実施(12月)
　　(エ) 海外研修(1月)と事前事後指導　2年生12名
　　(オ) 来年度体制について協力依頼
　　(カ) 「探究」講座内発表、千里フェスタ発表、論文提出、論文集発行
　　(キ) SGH 甲子園(3月) 5組参加、大阪大国際公共コンファレンス　参加予定
　2)　前回の会議での指導助言と現状・課題　＜資料1＞
　3)　中間評価にむけて　自己評価票　＜資料2＞
　4)　来年度事業計画と所要経費(千里フェスタ土曜実施、実践報告会開催、上限 740 万円)
　5)　課題　全校化(分担と教科間連携)・目標の共有・サステナビリティー

3，指導助言

●平成29年度　第1回運営指導委員会　予定　平成29年10月17日(水)午前

＜資料1＞前回の会議での指導助言と現状・課題

①代表の中間発表に関して

1.【生徒間で研究の交流】多様で興味深い視点からテーマを取り上げられているが、コメントが一方的である。生徒同士のディベートの機会を作ることが有効。 近いテーマの仲間で情報交換すると良い。

▸今年の試み：講座内発表の後に他のメンバーからコメントを聞く時間の設定

▸今年の試み：小グループ内で中間発表を行って意見交換

▸大学院生からの個別指導（昨年度から継続）

2.【現場とのつながり】地元の行政との連携や先進事例の見学があると、研究が現実的なものとなり、パワーも得られる。 例えば、地元でも児童虐待の事案があり、子ども家庭センターとの連携が欠かせない。また、自治体の広報に対しての提案は、ぜひ担当にフィードバックしてあげてほしい。

▸今後：講座ごとなら小回りが効く。可能なものから試みるつもりで指導に臨む。

3.【結論を急がない】一定論理的な形になっているが、結論に厚みが足りない。複数の情報源からていねいに情報を収集・整理して厚みのある研究にするのがよい。結論を急いでうまくまとめる必要はない。卒業しても問題への関心を持ち続けてほしい。

▸現在：複数の参考文献に当たることを奨励、ルーブリックにも追加

4.【先行研究】を調査、整理した上で、自分の研究の目的を設定するようにする。

▸今後：先行研究（一般書・大学院生の論文からたどるのもよい）、信頼できる二次資料（白書等）の探し方・利用の仕方を、各講座共通で説明し、その上で自分のリサーチ・クエスチョンを設定するように指導していく。

5.個々の発表に関して

- 先進事例の見学に行くことで研究のパワーが得られる。
- 情報の出所・年度を忘れずに示す。
- 市民が取り組めることを考えているのはよい。
- 発表のスライドの見やすさ、発声の明瞭さ、態度の明るさは重要。よくできている発表も、もう一歩という発表もあった。
- ファストファッションの研究は、身近な疑問から世界を学べるいい研究だ。リサイクルやリユースの視点も持ってほしい。

②課題研究以外の科目の教育に関して

1.【英語の指導方法】理解した内容について英語で発表するのは効果的な形である。CLIL(Content and Language Integrated Learning，内容言語統合型学習，下記囲みに説明)について検討を。

▸従来から：内容中心の授業を展開：1，2年必修科目「グローバル・コミュニケーション」、2年選択科目「時事英語」、3年選択科目「トピック・スタディズ」

▸変更：3年必修科目「グローバル・コミュニケーション」を内容/協同作業重視・4技能活用型に変更、3年選択科目「グローバルスタディズ」を新設

▸今後：「ライテイング」の授業で探究論文のタイトルと要旨の英語化指導からはじめ、2年「グローバル・コミュニケーション」・3年「トピック・スタディズ」「グローバルスタディズ」でのテーマ選択、海外研修旅行での発表に関し、関係を濃いものに

2.【英語学力の変容の計測】学校としてどう計測するのか。

▸現在：ベネッセの GTEC for STUDENTS（CEFR A1～B2 に対応）を1，2年生全員対象に年明け時期に実施。（一部生徒対象には、TOEFL IBT Practice Test を8月と12月に実施）

3.【他の教科への影響】 他教科における教員・生徒への積極的な影響についても目を向けると良い。

▸今後：他教科でのアクティブな学習形態を把握するとともに、変化を集約する

4.【知識の総合化】大学では、科目全体の体系化を試みている。知識を総合化して問題に対応していくという学問・学習の姿勢だ。そのため、例えば、図書館ではテーマ別の配架をしている。このような教育フレームの変更は労力を必要とするが、それは生徒のため、生徒の変化を引き出すためと考えて取り組んでいる。体系化やプロジェクト学習のためにフェイスブックなどを利用して卒業生のネットワークを活用することも検討すると良い。

▸現在：TOK(theory of knowledge, 知の理論)やアクティブラーニングについて、参考図書の購入・先進校視察・教員セミナー参加を行っている。

▸今後：国際教養・総合科学という名称の基本理念にも込められている考え方と言える。吸収した知見を組織的に導入していくよう努めていく。同窓会にもアイデアを説明し、協力を依頼していく。

(1)CLIL とは

CLIL はContent and Language Integrated Learning（内容言語統合型学習）の略語で「クリル」と読みます。内容（社会や理科などの教科ないしは時事問題や異文化理解などのトピック）と言語（実質的には英語）の両方を学ぶ教育方法です。

(2)特徴

「4 つの C」で授業が組み立てられていることです。「4 つの C」とは、Content（科目やトピック）、Communication（単語・文法・発音などの言語知識や読む、書く、聞く、話すといった言語スキル）、Cognition（様々な思考力）、Community ないし Culture（共同学習、異文化理解、地球市民意識） です。このうち、Cognition が最も重視されます。

(3)どのように教えるのか

次の 10 項目を満たすように教材を準備し、指導します。

1 内容学習と語学学習の比重を等しくする。
2 オーセンティック素材（新聞、雑誌、ウエブサイトなど）の使用を奨励する。
3 文字だけでなく、音声、数字、視覚（図版や映像）による情報を与える。
4 様々なレベルの思考力（暗記、理解、応用、分析、評価、創造）を活用する。
5 タスクを多く与える。
6 協同学習（ペアワークやグループ活動）を重視する。
7 異文化理解や国際問題の要素を入れる。
8 内容と言語の両面での足場（学習の手助け）を用意する。
9 4 技能をバランスよく統合して使う。
10 学習スキルの指導を行う。

(4) CLIL を行う利点

密度が濃く質の高い授業が可能になります。第二言語習得から見ると、中身のある内容により動機づけが高まる、意味のある豊かなインプットが与えられる、インターラクションを行う必然性が生まれる、深い思考を伴うので記憶に定着しやすい、4技能を有機的に統合できる、といった利点があります。また、CLIL はグローバル教育そのものでもあります。つまり、英語と知識と思考を駆使して他者と協働して新たな価値を創造する力を養うことができます。

What is CLIL? | CLIL Japan Primary. http://primary.cliljapan.org/what-is-clil/ 2017.1.20 閲覧

③評価に関して

1.できれば量的なエビデンスを示す。SGH・各教科について、ポリシーに定める力を身につけて卒業させているかどうかを計測するようにデザインする。大学では知識・英語力・国語力について、入学直後と卒業時にテストをして差を計測している。

＜資料 2＞平成２９年度スーパーグローバルハイスクール自己評価票

管理機関への提出期限：平成 29 年３月 27 日（月）
これに基づき評価委員が評価、公表

①研究計画の進捗等の評価

1. 研究計画の進捗状況

研究計画や具体的目標値の達成に向けて、予定通り進捗しているかどうか。また、特に構想により設定したグローバル・リーダー像を踏まえた卒業時に生徒が習得すべき具体的能力等の育成・向上に向けて、予定通り進捗しているかどうか。

→目標値に関し進捗が遅れているのは海外連携校。その他についてはおおむね順調に進めている。（現在、実績値集計中、アンケート分析中。）「卒業時に生徒が習得すべき具体的能力等」について各事業・指導単位でも再確認して年度をはじめるようにする。

2. 学校の研究体制

学校全体として体制を整え、組織的に取り組んでいるかどうか。（一部の教員ではなく，各教科・担当部署が連携・協力しているかどうか。）また指導体制・指導方法は研究のねらいに適したものとなっているかどうか。

→1年目は、実施しながら計画に修正を加える状況だった。2年目は、一定の見通しを持って計画し分担をすすめた。これらの経験を経てようやく各事業の目的・方法が明らかになり、業務や指導対象ごとのチームに委ねられる段階になった。これにより、不足している部分の拡充に取り組む。

3. 運営指導委員会

運営指導委員会が、専門的見地からSGHの運営に寄与しているかどうか。

→地元義務教育、大学教育改革、社会事業、教科教育の専門家として、課題研究の指導方法およびSGH 事業の運営に関する課題に対して具体的な指導助言を行い、助言は実際の指導に反映され、改善に寄与している。今後は、日常的な協力を充実する。

②教育内容等の評価

1. 教育課程の編成

a. SGH課題研究を実施するために学校が設定した教科・科目および対象人数は適切であったか。

→

①【設定した教科・科目】

従来の学校設定科目1年次「国際理解」・「探究基礎」、2年次「探究」、3年次「トピック・スタディズ」、および各学年英語専門科目を活用・拡充するとともに、大阪府「骨太の英語力養成事業」の一環として特に英語による発信力に注力する3年次選択科目「グローバル・スタディズ」を設定した。

1年生は国際文化科全員対象、2年生は人権・労働・環境を研究領域にする国際文化科の約半数の生徒、3年生は「トピック・スタディズ」・「グローバル・スタディズ」を選択する生徒を対象として指導を進めている。（2年生の残り半数の生徒は、人権・労働・環境と、基礎的社会構造として連関する教育・子育ての領域の課題研究の授業、または英語による論理的・批判的思考力・表現力を訓練する授業を受講している。）

以上のデザインのもと、課題研究と英語力双方の指導教員・生徒が相互に刺激を与え合い、補い合いながら指導を進めている。

②【授業形態と対象人数】

1年次の「探究基礎」は、1クラスを2分割して約20名で、グループワークを中心とした形式で、人権

・労働・環境の内容をテーマに、主に論理的思考力・表現力を育てる授業を進めている。

同じく1年次の「国際理解」は、クラス単位で、地理的歴史的な側面を中心に、グローバル課題という視点で、ゲストによる特別授業を組み込んで展開している。

2年次の課題研究「探究」は、クラスを解体した平均15名弱の講座の授業で、単独または共同研究を指導している。協働作業の経験・多角的な検討・指導および発表時間の確保といったメリットが明らかになってきたため、次年度は共同研究を基本とする予定である。

3年次の「トピック・スタディズ」・「グローバル・スタディズ」は、特に選択した生徒が、それぞれ模擬国連の実施・英語による発信力の養成を主眼に置きながら、経験を通した知識・能力を育てるよう指導している。

本校の「国際文化科」設立趣旨に従い、1年次には全員に対し、将来のグローバルリーダーとして必要となる基本的な知識技能を身につけさせる。その上で、学年進行に伴って各生徒が特に関心を持つ領域に分かれて学習や訓練を選択していきつつ、互いに刺激し合う事のできる現在の教育課程および対象人数は、適切であるといえる。

b. グローバル・リーダーを育成するため、現代社会に対する関心と深い教養、論理的思考力、批判的思考力、コミュニケーション能力、問題解決力、行動力等を育成するための先進的な教育課程の研究開発が効果的に進んでいるかどうか。

→行動力については、「地域に現場がある」研究テーマについては訪問して取材をすることを勧めてきた（実績：個別に企業への取材をする生徒も出てきた）。また、例えば企業等に対しての調査の依頼や実施を生徒自ら行えるよう、学校と関係機関の信頼関係の構築を進めてきた（実績：GCNJ 関西分科会、関西学院大学高大接続センター、大阪大学国際公共政策研究科）。今後、これらを進展させていく。

2. 校内の授業改善

SGHによる取組が、独自の取組と併せて、課題の解決に向けて主体的・協働的に学ぶ授業になっており、また教科の連携・協力により学校全体の授業改善が図られているかどうか。

→

①【主体的・協働的に学ぶ授業】

1年次「国際理解」では、ロールプレイを取り入れた授業で社会問題に対する立場の違いを理解させる活動等を取り入れている。また、後期から始まる「探究基礎」では,独自開発のテキストを利用して、グループにタスクが与えられ、調査し、討議し、ディベートを行い、現実的な解決策を案出する授業展開をしている。さらに、これに先立つ、夏期グローカル研修参加者は3日間の研修を通して、グループで「振返り」、それをまとめて発表することを繰り返し行っている。さらに後日クラスにおいて研修の成果を発表し、これを「探究基礎」の導入としている。

2年次「探究」では、共同での研究においてはもちろん、個人研究であっても講座内の小グループ内、講座内、校内の各発表において意見交換をしながら研究を深化・発展させる仕組みを設定している。（また、同じく2年次「グローバル・コミュニケーション」では、段階的に練習を積み上げて、学年末にはチームに分かれてディベートを行う授業設計としている）

2年生の代表が参加するニューヨーク研修に関しても、研修の成果をいかに普及還元するかを課題に、参加者がグループとして企画・準備・運営をするように指導した。結果、生徒たちは積極的に取り組み、指導教員もグループに課題解決を求める際の指導上の留意点について経験を通して学んだ。

3年次「トピック・スタディズ」では共同で国際的課題について調査・発表を行うことを継続して行

い、学年の終わりには2人または3人で指定された国の代表となり難民の受入れといった国際的課題に対してその国の代表として意見陳述をする。

②【教科の連携・協力による学校全体の授業改善ー21世紀型学力モデルへの対応】

取り組み総括のために調査を行った結果、課題研究以外の授業においても、生徒が主体的・協働的に学ぶ授業が行われていることがわかった。（例：英語科・体育科・家庭科・国語科・社会科）

今年度は、今後のさらなる授業改善のため、教員研修として「グローバル市民教育」をテーマに取り上げ、また、先進校視察を年間計画に位置づけて実施した。岐阜県立大垣北高等学校では、アクティブラーニングについて重要な情報源を得ることができ、宮城県立仙台第三高等学校では授業創造プロジェクトチームの取り組みを調査することができた。校内授業改善チームを通じて導入を図ることが期待される。

なお、課題研究と教科の連携については、当初から想定していた英語・社会・国語との連携・協力に加えて、テーマによっては、家庭科・人権教育・数学（統計）・保健との協力が望ましいことがあることがわかってきた。「課題研究」の指導リソースとして校内の各教員が協力する形が期待できる。同時に、そのことにより各教科の指導スタイルを見直すヒントが得られることも期待される。

3. 特色ある教材開発

課題研究を効果的に推進するための教材を開発しているかどうか。

→

①1年次「探究基礎」において、課題研究の基礎を指導するためのテキスト「探究基礎通信」を開発し、今年度は冊子化して利用している。グループワークのワークシートや参考文献の記述方法などをまとめたものである。HP 上でもデータを公開している。年度ごとに改良を加えていく計画で、次年度分の見直し作業を終えている。

②2年次「探究」指導教員が、共有フォルダで教材を共有し、年間授業計画・プリント教材・指導と評価を行うためのルーブリックを共同利用している。指導の流れとルーブリックを共通化する事により、同時展開している他の講座との混合合評会（普段の講座を解体し、違うテーマを研究している生徒に対して発表し、共通の観点で相互評価する）を開くことが担当者の会議の中で、提案されている。

③海外研修（ニューヨーク）のための事前指導の指導手順を改善した。大阪府が導入した Super English Teacher が active learning のスタイルで研修に臨む準備をする指導手順を計画し、外部講師とともに指導した。また、研修参加者がチームとして成果の普及を企画・運営するように研修中・研修後の指導手順を開発した。『SGH 研究開発実践レポート』に掲載し、HP でも公開する。

③外国語教育・国内外研修等の評価

1. 外国語教育に関する取組

a. 外国語教育に関する取組は、課題研究との関連性が明確であり、研究課題に取り組むために必要な能力を向上させるための取組が日常的に行われているか。

→

1年次は、日常生活にかかわる題材を中心にリスニング・スピーキングスキル向上のための授業を必修科目「グローバル・コミュニケーション」において行っている。

2年次は、理由を示して意見を述べる、チームでリサーチして意見を戦わせるスキル向上のための授業を必修科目「グローバル・コミュニケーション」において行っている。また、グローバルな時事問題について理解し意見を述べるスキル向上のための授業を選択科目「時事英語」において行っている。

3年次は、グローバルな課題について理解し協働して発表するスキル向上のための授業を必修

科目「グローバル・コミュニケーション」において、国際問題について理解し協働して発表するスキル向上のための授業を選択科目「トピック・スタディズ」において、幅広い問題に関して理解し論理的に伝えるスキル向上のための授業を「グローバル・スタディズ」において行っている。

テーマおよびスキルについて（グローバルな課題についての知識・相手の話の要点を予想し理解する力・根拠を示して効果的に相手に主張を伝える力）課題研究との関連性は明確である。ただし、スキルは生徒の英語運用能力の発達段階に合わせた指導になるよう、また、テーマについては汎用性・発展性のあるものとなるように配慮している。

b. 英語等も含めたグループワーク、ディスカッション、論文作成、プレゼンテーション、探究的学習等は、課題研究を実施するための効果的な取組となっているか。

→英語の各専門科目、「探究基礎」・「探究」において、意見を述べる・グループとして意見を整理して発表する・分担して作業を行う・適切なリソースから得た情報をわかりやすく表現する・話し言葉や主観的表現を論文に求められる表現に直す・論理的に矛盾なく研究成果を表現する・聞き手を意識してわかりやすいスライドを作り話す等を目標として示し、これらのアウトプットを含むスパイラル構造（サイクルを繰り返しながらレベルを上げていく形）となるよう指導している。

国内海外研修等に関する取組

フィールドワークや成果発表等のための国内海外研修等が、課題研究を実施するための効果的な取組となっているか。

→（夏季グローカル研修・企業大学訪問研修の課題研究への寄与をアンケート結果から示す。海外研修の各自のテーマに対する効果をアンケート結果から示す。）

④外部連携・その他の取組の評価

1. 国内外の大学や企業、国際機関等との連携

a. 国内外の大学との定常的な連携により、専門性の高い指導（外国語による指導も含む）や高大の接続の改善を図るための効果的な取組が行われているかどうか。

→（関西学院大・大阪大・大阪教育大：発表し講評を受ける場を毎年提供、関西学院大：TA による論文指導、関西学院大：国際協力に関する研修受入れ、京都大・大阪大：継続的教員研修。）

b. 国内外の企業、国際機関等との定常的な連携により、実社会との関わりによる社会貢献の意義や実感を芽生えさせる効果的な取組が行われているかどうか。

→（国連グローバル・コンパクトネットワークジャパン事務局および関西分科会各社 CSR 管轄部署：生徒の訪問研修受入れと受入れ後の電子メール等によるフォローアップ＜フォローアップは依頼中＞、中小企業家同友会北大阪ブロックの企業：生徒の訪問研修受入れ。）

2. その他に関する取組

a. 地域や学校の特性を生かした取組が行われているかどうか。

また日本の良さや伝統文化への理解を深めるための効果的な取組が行われているかどうか。

→大阪の中にあるグローバル課題を知る研修を、コリア国際学園・とよなか国際交流協会・西淀川公害にかかわる環境 NGO あおぞら財団の協力を得て継続実施

b. 将来留学したい又は国際的に活躍したいといった自らの将来ビジョンを明確化し、自律的なキャリアデザインを促すための取組が行われているかどうか。

→1年次の早い時期（6月、7月）に①クラス単位の特別授業「グローバルな課題と高校生の日常生活」と②国際問題に取り組む若手研究者による講演（4クラス合同）を実施、継続して各学年で③国

際協力団体から講師を招き国際理解講座を実施、④関西学院大学において国際協力ボランティア経験者と指導者による研修を実施、また⑤留学経験のある教員を中心に留学説明会を実施

⑤成果の分析・普及等の評価

1. 成果と課題の分析、検証

a. 研究の課題や研究のねらいに対応した、SGH指定前後の生徒の変容（学習意欲、進路の状況等を含む)が見られたかどうか。

→（事前に提示されていた「目標設定シート」に記載されていた項目と本校の SGH 目標に関わる意識の変容についてアンケート結果を示す。指定前については資料がないためベネッセの資料や「入学前と比べて」の質問を活用）

b. SGHの取組を通じて、グローバル人材育成の重要性の認識等、教員の意識の変容が見られたかどうか。

→（教員アンケートを実施）

c. 仮説に基づく成果や課題の分析が適切に行われているかどうか。

→（学校教育自己診断および SGH アンケートの結果をもとに示す。）

2. 成果等の検証の結果に基づく取組の改善

明らかになった課題を基に必要な改善の取組をこれまで進めてきているかどうか。

→（全校体制に向けての取り組み、教材とルーブリックの共有化、海外研修のカスケード効果発揮のための方策、企業研修の調整等、前年の年度末報告で記述した課題にそって実績を記述）

3. 成果の普及、共有・継承

a. 研究成果の普及に積極的に取り組んでいるかどうか。

→（実践報告レポートの SGH・アソシエイト校への送付、実践報告レポート・探究基礎テキスト・論文集 PDF の Web 上での公開、運営指導委員会の助言内容・教員研修の内容・活動報告の Web 上での公開、生徒研究発表会の公開、（実践説明会は年次計画に基づき3，5年目に実施予定）

b. 学校として研究成果の共有・継承が図られるような取組を進めているかどうか。

→（実践報告レポートの配布、校内教員研修の実施、毎週の SGH 委員会開催、運営指導委員会への指導教員の参加、教員アンケート、業務内容分掌リスト作成による「見える化」、先進校視察）

■指導助言（要約）

【発表】

1. すぐに提案ではなく、**自分に何ができるか**を考えたり、市民への**呼びかけ**を行ったりしているのがよい。→他人事でなくす。具体的な行動につなぐ。
2. 話し方が、スピード・明瞭さの点で、わかりやすい。
3. 発表されていた研究に関わる**事例が地元にたくさん**ある。子育て支援に学生ボランティアを活用するという提案をしていたが、東淀川で学生ボランティアを活用する取組もすでにある。**ぜひ取材に**行くとよい。

【全校化】

4. **そこに行けば「探究」で何が行われているのかがわかる「場所」**があることは重要。
5. **「今こんな手助けが欲しい」と発信**して、**資源を持っている先生を生徒が巻き込んでいく**のがいい。そういうつながりが増えていくと、課題研究で何をやっているのかが全体に見えるようになる。クラブとの調整もスムーズになることが期待できる。
6. **先生全員が自己紹介を生徒に公開**するのも一つの方法だ。大学での専攻や興味をもっていることがわかると、相談にのってもらいやすくなる。意外な趣味を持っていることがわかって、先生同士の相互理解も進む。
7. チーム指導を発展させるには、**話し合う機会を増やす**しかない。30 分から1時間じっくり話して情報交換する。これを繰り返すと**自ずとビジョンが共有**される。**SGH はチームビルディングのきっかけ**だと考えると良い。時間がかかるので大変だが、「誰のためなのか、生徒のためだ」と考えれば動くことを納得してもらえると思う。
8. **「そう言われれば、こんな生徒の変化があった」**といったこと**を拾い上げる**ことは重要なので、勤務している大学では専攻内の会議を3時間かけてじっくりやっている。また、3ヶ月に一回は、専攻横断談話会をやっている。

【評価】

9. 個人の**自己評価シート**があると良い。それを見て、ここが足りないなと感じた時に相談できる。
10. 勤務している大学では、まず**学生が自分で目標を書き、担任が相談に乗り一緒に設定**する。そしてその後は、**半年ごとに進捗を確認し、助言**する。→**文字化することで客体化**でき、学生と教員が一緒に検討し、斜め上からのアドバイスが言える／聞ける。
11. 学習の歩みの記録を残し、見返すことができるように、**クリアファイルを使ってポートフォリオ**を作る方法も良い。
12. **自己評価と他者評価を組み合わせた**「ルーブリックに頼らない」評価を、三国ヶ丘高校は試みている。
13. **「この生徒はこう変わった」ということがわかるストーリー**／エピソードも、評価者に対して説得力がある。
14. アンケートの文章分析（**テキストマイニング**）という手法もある。
15. **できていないことをきちんと書き出すことで、要因分析をし、対策**が立てられる。PDCA を回すためには、重要なことだ。
16. グローバルリーダーを育てられたかどうかを評価するのは難しいことだが、**試案を立てて評価を試みることで見えてくる**事がある。**評価法を評価するという姿勢**で試みてもらいたい。

【サステナビリティー】

17. SGH は更新がないことが明らかになった。持続可能になるように、人材育成システムを作って欲しい。指定後を見据えて、学外団体で**基金**を作っている他県の高校もある。
18. **来年は千里フェスタ「学習成果発表会」を土曜日に開催**するのなら、広く同窓生に呼びかけるとよい。卒業生はどんなことをやっているのかに興味があるので来る人も多いだろう。そこで必要な情報を持っている人が見つかるかもしれない。財政面での援助も期待できる。→**卒業生とのつながりを活性化して学校の資源として活用する試み**を**「ホームカミングデー」**と名付けて行っている大学も多い。